Exhibition
REMEMBRANCE OF THE FUTURE TO COME

実施報告書

2011.8.26
ART-AID実行委員会

† **プロジェクト期間**

2011年4月 – 2011年7月

† **プロジェクトの趣旨**

ART-AID: Basel Project for Japanは、アートを介し、東日本大震災被災地復興支援を目的とする、チャリティ・アート・プロジェクト。

† **プロジェクトの２つの目的**

①企画展「Remembrance of the Future to Come (来るべき未来への追憶)」の実施

スイス国バーゼル市にて企画展を実施。会場入り口で募金を募り、その全額をあしながが育英会に震災孤児支援の名目にて寄付する。

②1%プロジェクト

ART-AIDの趣旨に賛同したアートバーゼル参加ギャラリーより、同フェア売上高の1%を各国赤十字社に被災地支援を目的として寄付するよう呼びかける。

† **ボランティアによる組織**

当展キュレーターである渡辺真也のTwitter上の呼びかけに賛同した人間で組織し、震災直後の3月29日より、都内にて毎週定例会を開始。参加作家および実行委員会メンバーは、全員ボランティアで行った。

† **バーゼル/東京、２つの実行委員会**

東京とバーゼルで2つ実行委員を募集。東京22人、バーゼル7人、5カ国からメンバーが参加。

バーゼル現地での実行委員は、ドイツ在住の国際マネージメント担当者が現地大学などで募集。

実行委員会の運営は、地理的・言語的差異がある中、インターネットを駆使して運営を行う。

写真〈上〉東京実行委員会
写真〈下〉バーゼル実行委員会

† **展示会名**

“Remembrance of the Future to Come”
（来るべき未来への追憶）

† **参加アーティスト**（※アルファベット順）

ヨーゼフ・ボイス　Joseph Beuys
インゴ・ギュンター　Ingo Günther
畠山直哉　Naoya Hatakeyama
大巻伸嗣　Shinji Ohmaki
オノ・ヨーコ　Yoko Ono

**

† **キュレーター**：渡辺真也　Shinya Watanabe
† **会場**：　スイス国バーゼル市 旧Plug.in
Sankt Alban-Rheinweg 64 4052 Basel, Switzerland
† **展示期間**：　2011年6月11日（土）－2011年6月29日（水）
† **開場時間**：11AM – 6PM
※アートバーゼル期間中(6月15-19日)の開場時間：　10AM – 10PM
† **入場料**：　無料（会場にて震災孤児への寄付金を募る）

写真〈上〉展示会場のウォールテキスト
写真〈下〉会場風景

† **後援**： 在日スイス大使館 / 在スイス日本大使館

† **スポンサー**

①企業スポンサー　22社

Christoph Merian Foundation（文化財団）、iaab（アーティスト・イン・レシデンス）、
TWEAKLAB（映像機器）、Selmoni（照明）、テンプル大学ジャパン（教育）、Hubnet Express（美術輸送）、
McCaffrey Fine Art (ギャラリー)、Baumshule Schmid (園芸)、sea (広報)、Swiss World Cargo (国際輸送)、
Hortima (園芸)、Hochschule für Gestaltung und Kunst (大学)、Sushi 'n Moore (ケータリング)、
Druckerei Dietrich AG (印刷)、Gasthof zum Goldenen Sternen (レストラン)、NY ART BEAT (メディア)、
ミサワホーム (住宅)、Josy Kraft E.L.S. (美術品輸送)、洗足池病院ギャラリー古今(ギャラリー)、
Prota-tec werbetechnik (フレーム)、中川ケミカル（カッティングシート）

②個人スポンサー　4件

Uta und Ulrich Müller-Gierok、加治屋健司、中尾浩治、山口桂

† **展示協力**

VOLTA7 (アートフェア)、Stay Strong! Japan (チャリティーアート団体)、Kunstmuseum Basel (美術館)、
Museum für Gegenwartskunst (美術館)

In Support of: International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies (NPO)

Part 1　展示報告

展示“Remembrance of the Future to Come”（来るべき未来への追憶）キュレートリアル・ステートメント

大惨事に直面したとき、アートが果たすべき役割とは何か？　今年3月11日、未曾有の巨大地震と津波という自然の計り知れない脅威を前に、日本のアーティストやアート関係者の多くは、無力感に苛まれました。そんな中、地震発生から実に9日後、瓦礫の中から救出された16歳の少年は、将来の夢を聞かれてこう答えたのです――「ぼくはアーティストになりたい」。

東日本大震災発生からちょうど３ヶ月後にあたる6月11日より開催する本展覧会「来るべき未来への追憶」は、この大災害をアート作品を通して見つめる試みです。この展示では、私たちの想像力を刺激するアート作品を通じて、現在を来るべき未来という視点から眺めます。未来に思いを馳せる、それはすなわち「希望」を持つことにほかならないのです。未来の視点から現在を「追憶」することによって、私たちは言葉にならないほどの喪失をも、乗り越えることができるのではないでしょうか。

現実がどんなに厳しいものになろうとも、理想を語るというアートの使命は不変です。未来への想像力を喚起することで、私たちの現在は過去のものとなり、希望を支える記憶へと変容する。そしてその灯りを点すものこそが、アートであり、アートの力なのではないでしょうか。

ヨーゼフ・ボイス：「1984年6月2日　東京芸術大学での対話集会」

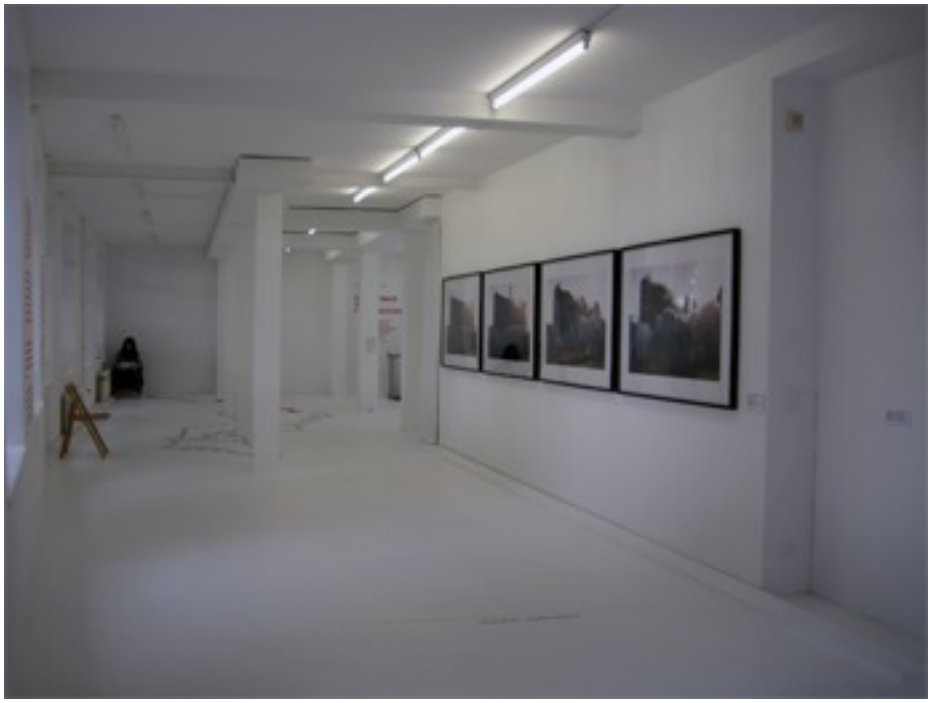
1984年、ボイスが東京芸術大学で開催した対話集会の記録映像を上映した。
ボイスはこの年、自身のプロジェクト「7000本の樫の木」への資金集めを目的に来日、結果的に日本はこのプロジェクトの最大のスポンサー国の一つとなった。ボイスは、西武グループによるスポンサーシップの交換条件として、日本での個展を受け入れ、さらに公開対話集会の開催を提案した。
この対話集会では、自身の美術活動の資金作り目的で来日したことを日本の美大生たちに激しく批判されながらも、それは美術活動に関する古典的な問いである、と学生たちに語りかけ、自身の「社会彫刻」についての信念を語った。
なお、本ビデオの監督は畠山直哉。集会の舞台である東京芸術大学は、インゴ・ギュンターが教鞭を執った大学である。本展では、ボイスによるドイツ語発言を日本語に、日本人学生からの日本語での質問にドイツ語字幕を施した90分の特別版を上映した。

インゴ・ギュンター：「Thanks a Million」（新作）

3月11日、東京で震災を経験したドイツ人作家インゴ・ギュンターは、津波の壊滅的被害を受けた東北の海岸線に松林を再生させるプロジェクト、「Thanks a Million」を提案した。
日本の海岸線の象徴的な風景である松林の多くは、農作物を潮風から守るための防風林として、江戸時代に人間の手で作られた。その美しさから白砂青松と讃えられ、多くの日本の歌人たちを虜にしてきた東北地方の松林にあった約100万本の松の木は、残念ながら今回の巨大津波で根こそぎ奪い去られてしまった。そんな中、陸前高田市の高田松原は、たった一本残り、復興のシンボルとして人々を勇気づけている「奇跡の松」がある。
本プロジェクト「Thanks a Million」では、作家が100万の松の木の種を提供し、そこから生まれた松の木を植えることにより、東北の美しい海岸線を取り戻すとともに、被災地と世界中の人々との永続的な関係性の構築を目指そうと提案した。

畠山直哉：「Zeche Westfalen I / II Ahlen」2003

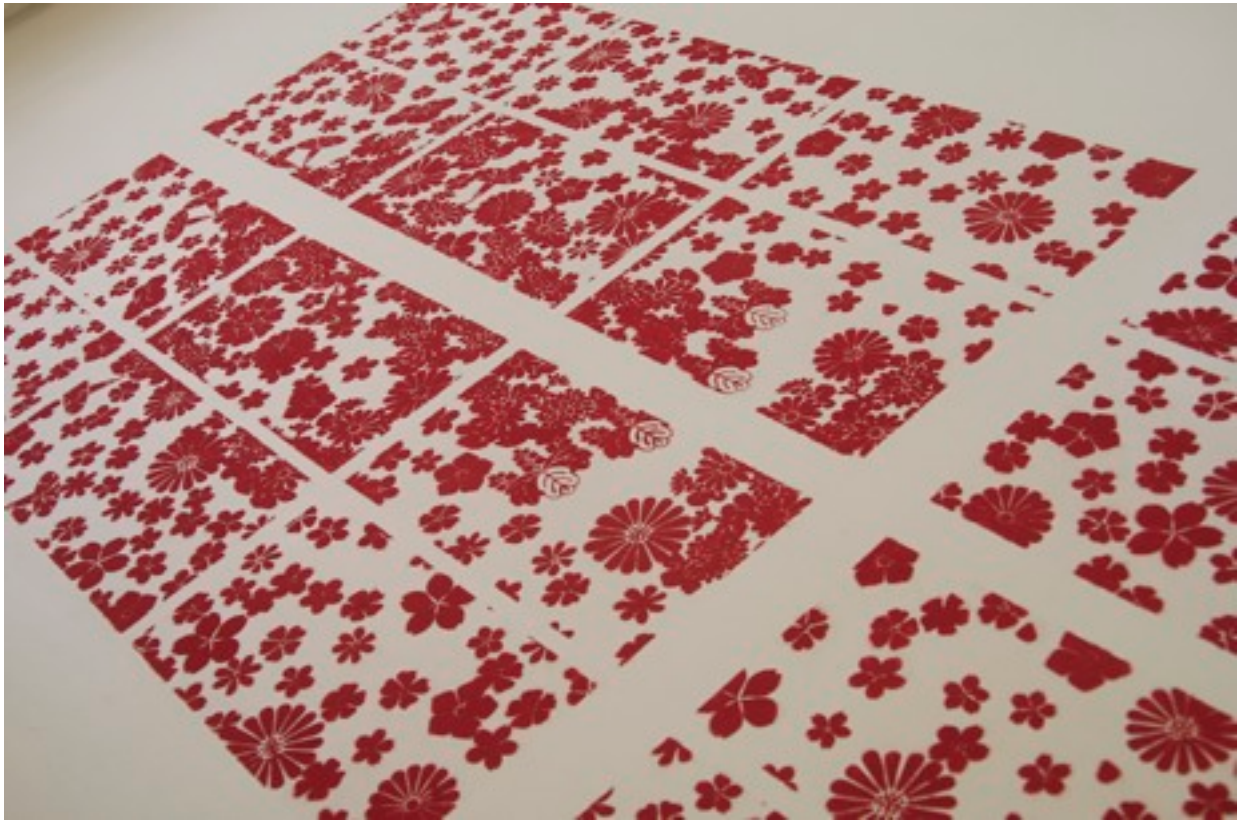
被災地域である岩手県・陸前高田市出身の畠山直哉は、ドイツの炭坑が爆破される瞬間を捉えた写真シリーズ「Zeche Westfalen I/II Ahlen」（ヴェストファーレン炭鉱I、II、アーレン）を出品した。
畠山は、「壊される予定の建物があるから写真に撮っておいてくれませんか？」との依頼に、「もうすぐ死ぬ人がいるから肖像を撮っておいてくれませんか？」という依頼に似た響きを感じたと言う。故人を懐かしむためにその人の肖像が必要なように、消えてしまった建築を懐かしむために建築写真が必要とされる。故に、畠山は、「記録」は常に未来からの視線を前提としていると考える。
自身の家族をも奪い去った大津波が陸前高田市を襲った後、本作品のもつ意味は完全に変わってしまった。大震災によって、写真はその本来の役割――「記憶への奉仕」――を再度取り戻したといえる。そして「来るべき未来への追憶」という視点から捉えた際、これらの過去の「記録」はさらなる変化を遂げることだろう。



大巻伸嗣：「Echo - Eclipse of Life 」（新作）

大巻伸嗣は、カーペットの上に色鮮やかな岩料で花柄を描き、観客が踏んで壊すことで次第に色が滲んでいき、別の空間へと生まれ変わって行く作品「Echoes」で知られている。本展では、大巻は新作「Echo - Eclipse of Life」を発表した。

　大巻は、花柄のイメージを、太陽光へと重ね合わせた。窓から差し込みフロアーを照らした自然光の瞬間を形取ることで、大巻はその瞬間を、あたかも日食の様に結晶化させようと試みた。フロアーに描かれた赤い花のイメージは、日食の瞬間を結晶化し、それは災害の記憶のみならず、生と死というサイクルさえも隠喩している。ある一瞬の記憶が、移り変わる瞬間の中でどう保ち続けることができるのか、大巻は問いかけた。



オノ・ヨーコ：「Wish Tree」

オノが90年代から世界各地で展示している作品「Wish Tree」は、人々が自らの希望や平和への願いを書いた短冊を１本の木に吊るすという、参加型作品である。オノ自身が、幼少の頃、神社でおみくじを木に結びつけたり、七夕で短冊に願い事を書いた経験がもととなっている。

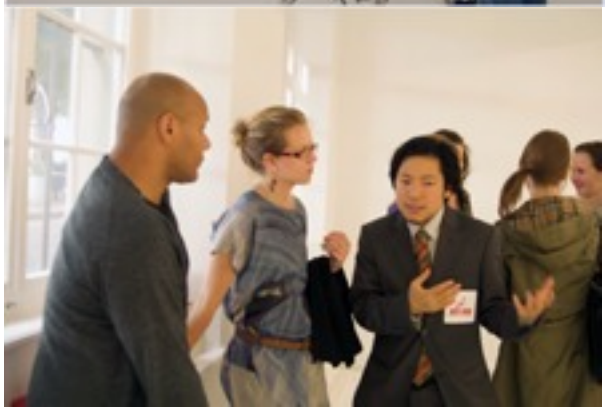
「ひとりで見る夢はただの夢。みんなで見る夢は現実になる」と語るオノ。本作品はバーゼルの地における内省の場となり、参加者の深い共感と願いは、地球の裏側にある被災地へと届けられる。

† オープニングレセプション

写真〈左〉左からインゴ・ギュンター、
渡辺真也、大巻伸嗣、佐藤晃
写真〈右〉会場風景

2011年6月11日（土） 6 - 8 PM

震災からちょうど3カ月後の日にオープン。バーゼル市内を中心に美術・建築関係者を中心におよそ200名の来場者があった。レセプションには、Sushi 'N Mooreが提供するお寿司をふるまった。



† アーティストトーク

“The Great East Japan Earthquake:
How Art Can Find Its Own Way” （英語のみ）

2011年6月12日（日）11AM – 1PM

出演：インゴ・ギュンター、大巻伸嗣、佐藤晃、渡辺真也
来場者：30名

震災以降のアートの可能性を探るトーク
パネリスト３名は、それぞれの立場から、震災以降のアートの可能性について対話した。被災の現実を再度目の当たりにして、トーク参加者全員が感極まって涙する、というアクシデントも発生。

† 佐藤晃によるビデオ上映

トーク会場にて、震災で母を失った佐藤晃の話と映像作品を上映。

その後、佐藤晃氏のビデオ作品「In the Seafog」のビデオを、展示期間中、特別上映することにした。

写真〈上〉アーティストトーク登壇者／写真〈左下〉佐藤晃氏

Wish Treeの植樹会

展示終了後、オノ・ヨーコの作品「Wish Tree」に使われた木 (Cornelia Cherry Tree)は、現地の子供たちと一緒にバーゼルの住宅地にある公園に植樹。

写真：植樹会の風景

† PR

①ポスター (A2サイズ)　300枚

200枚はSea業者を通じてバーゼル市内を中心に張り付けて告知

②チラシ (A5サイズ)　15,000枚

2000枚は、業者を通じてバーゼル市内を中心に配布
3500枚は、アートバーゼルの協力の元、アートバーゼル会場や周辺にて担当業者が配布

残りは実行委員会メンバーや、バーゼル日本人会の皆で手分けして、バーゼル市内の文化施設やレストラン、カフェなどにて配布

③プレスリリース

英語、日本語、ドイツ語の３言語からなるプレスリリースを作成スイスのメディア、国内外のアートメディアにメールで送信
HPにダウンロード可能な形でアップ

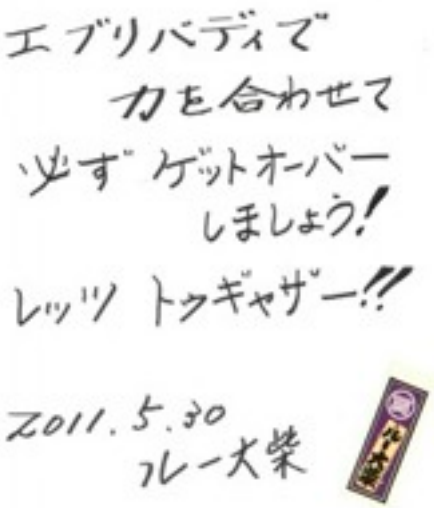
写真〈上〉展示フライヤー
写真〈下〉展示ポスター

賛同メッセージ

茂木健一郎
（ART-AID実行委員会スーパーバイザー）

中田浩二
（鹿島アントラーズ）

ルー大柴
（タレント）



掲載記事

† 新聞

毎日新聞岩手県版 (July 10, 2011)
「陸前高田で母捜索の映像上映 - 被災地出身、佐藤さん作品」

Japan Times (July 16, 2011)
"Remembrance of the Future to Come"
by Shinya Watanabe

2011.6.10 (岩手県版)

毎日新聞 2011年(

陸前高田で母捜索の映像上映

被災地出身、佐藤さん作品

スイス復興支援展に特別参加

あすから開催

† 雑誌

Seven Hills 2011年9・10月合併号 (第24号)
スイス・バーゼルから届けられた願い
「Remembrance of the Future to Come」 来るべき未来への追憶

Moc Japan 9月下旬発売予定　2号
「失われた百万本の木 - 一粒の種を植えることから松林がよみがえる」
by インゴ・ギュンター

† Webメディア

Real Tokyo: Real Cities (July 06, 2011)
040: from Basel - 被災者たちに捧げられた『来るべき未来への追憶』
by 稲尾新吾
www.realtokyo.co.jp/docs/ja/column/realcities/bn/cities_040/

OCNアート artgene投稿展覧会
「バーゼルから愛を込めて」
by Keiko S Hooton
http://www.artgene.net/event3.php?EID=8948

Part 2　ウェブ分析

ウェブ構成

TOPページ

- ART-AIDとは？
- プロジェクト概要
  - 実行委員会について
- 企画展概要
  - 参加アーティストについて
    - 展示会場について
- 賛同メッセージ
- 寄付のお願い
- 記事・レポート
- リンク
- お問い合わせ

ウェブレポート1

ユーザー サマリー

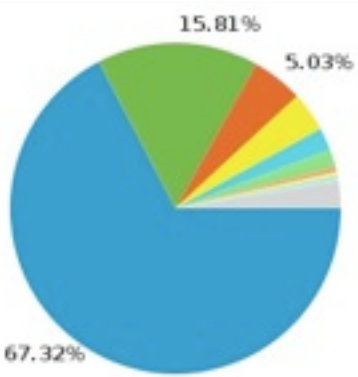
2011/05/18 - 2011/06/30

このサイトのユーザー数 2,111

- **4,232** 訪問数
- **2,111** ユニーク ユーザー数
- **17,551** ページビュー数
- **4.15** 平均ページビュー数
- **00:03:20** サイト滞在時間
- **45.58%** 直帰率
- **49.29%** 新規訪問数

国別セッション数

	詳細レベル: 国/地域	訪問	訪問
1.	Japan	2,849	67.32%
2.	Switzerland	669	15.81%
3.	Germany	213	5.03%
4.	United States	164	3.88%
5.	France	92	2.17%
6.	United Kingdom	73	1.72%
7.	Netherlands	23	0.54%
8.	Italy	15	0.35%
9.	Singapore	13	0.31%
10.	Hong Kong	11	0.26%



5月18日のサイトローンチから、6月30日の企画展示終了までで数値を計測する。
コンテンツの充実と共に、全体的に数字が上がってきており、定期的に訪れているユーザも少なからず居たと思われる。全体的な数字としては、計測が短期間であるので断定はできないが、数字としては悪くはないと思われる。

ウェブレポート2

最も多い訪問の回数: 1 回

現在の訪問を含めたこのユーザーの訪問数	ユーザーの合計セッション数	全セッションの割合
1 回	2,088.00	49.34%
2 回	390.00	9.22%
3 回	184.00	4.35%
4 回	121.00	2.86%
5 回	89.00	2.10%
6 回	70.00	1.65%
7 回	63.00	1.49%
8 回	52.00	1.23%
9 - 14 回	247.00	5.84%
15 - 25 回	279.00	6.59%
26 - 50 回	285.00	6.73%
51 - 100 回	331.00	7.82%
101 - 200 回	33.00	0.78%

大多数が1回のみの訪問であったが、9回以上の訪問回数が若干であるが伸びてきているのが特徴的である。
要因としては、そのほとんどが実行委員会メンバーだと想定できるが、その要因を排除しても、総じて美術に感心が高いユーザには興味深いサイトであったと思われる。

最も多い滞在時間: 0 - 10 秒

訪問の滞在時間	この期間内のセッション数	全セッションの割合
0 - 10 秒	2,072.00	48.96%
11 - 30 秒	330.00	7.80%
31 - 60 秒	302.00	7.14%
61 - 180 秒	608.00	14.37%
181 - 600 秒	507.00	11.98%
601 - 1,800 秒	328.00	7.75%
1,801+ 秒	85.00	2.01%

離脱率にも直結してるが、滞在時間が10秒以内が多いということは、訪問したが、目的とする内容が得られなかったのではないか、と思われる。しかし、60秒以上閲覧しているユーザ（おそらくアートに関心の高いユーザ）に対しては、読み応えのある内容を提供できたのではないかと思われる。

ウェブレポート3

表示回数の多いページ

プロジェクト概要関連が多く閲覧されているが、賛同メッセージ関連の閲覧も多いのが特筆すべき点である。これは6月7日に掲載された鹿島アントラーズ　中田浩二選手のインタビューページを掲載したのが要因であり、このサイト全体の数字に大きく影響を与えているポイントでもある。

137 種類のページ タイトルの合計表示回数 17,551

コンテンツのパフォーマンス

ページビュー数	ページ別訪問数	平均ページ滞在時間	直帰率	離脱率	$ インデックス
17,551 サイト全体の割合: 100.00%	12,912 サイト全体の割合: 100.00%	00:01:04 サイトの平均: 00:01:04 (0.00%)	45.58% サイトの平均: 45.58% (0.00%)	24.11% サイトの平均: 24.11% (0.00%)	$0.00 サイトの平均: $0.00 (0.00%)

	ページ タイトル なし	ページビュー数	ページ別訪問数	平均ページ滞在時間	直帰率	離脱率	$ インデックス
1.	ART-AID Basel Project for Japan	4,246	3,068	00:01:14	39.06%	33.51%	$0.00
2.	企画展概要 | ART-AID	1,234	786	00:01:08	44.30%	20.02%	$0.00
3.	ART-AIDとは？ | ART-AID	1,153	895	00:00:37	31.31%	14.40%	$0.00
4.	プロジェクト概要 | ART-AID	1,076	761	00:00:27	27.59%	7.71%	$0.00
5.	ART-AID	997	417	00:01:38	32.41%	18.36%	$0.00
6.	記事・レポート | ART-AID	966	619	00:00:31	12.12%	11.70%	$0.00
7.	賛同メッセージ | ART-AID	901	719	00:00:45	43.06%	17.31%	$0.00
8.	寄付のお願い | ART-AID	702	571	00:00:44	88.98%	31.48%	$0.00
9.	鹿島アントラーズ 中田浩二選手からメッセージをいただきまし	443	309	00:02:28	59.90%	37.70%	$0.00
10.	実行委員会について | ART-AID	380	329	00:01:48	55.56%	28.42%	$0.00
11.	参加アーティスト | ART-AID	364	303	00:01:25	48.81%	31.04%	$0.00
12.	Exhibition | ART-AID	326	239	00:01:07	61.11%	31.60%	$0.00
13.	失われた百万本の木 —— 一粒の種を植えることから松林がよ	264	242	00:03:08	77.56%	62.50%	$0.00
14.	展示会場について | ART-AID	247	208	00:01:08	18.18%	17.00%	$0.00
15.	展覧会、いよいよオープン | ART-AID	244	207	00:02:01	68.07%	51.23%	$0.00

Part 3　プロジェクト総評

† 展示の総来場者数

約3000人（期間2011年６月11日-6月29日　18日間）

† 寄付総額

展示会場に設置の募金箱

CHF 6,388.50　換算円貨額608,760円　（換算相場1CHF 95.29）

※全額をあしなが育英会「心のケアのための施設建設用の窓口」へ寄付

† 総収入（展示実行資金）

2,413,818円

個人スポンサー　1,094,609円（12件）

企業スポンサー　1,222,525円（ 6件）

Paypal経由からの個人スポンサー　96,684円

† 総支出

2,413,818円

（展示制作費127,875円、展示費323,375円、輸送・通信費356,077円、交通費856,534円、滞在費314,421円、交際費78,414円、雑費357,123円）

展示の総評１

†好評だった展示と作品

展示会場は、赤を基調とした作品が生えるホワイトキューブ空間に仕上げた。結果、すべての作品がバランス良く、ミニマルかつ美しく仕上げることができた。
ライン川沿いの通りから見える、畠山直哉の大型写真作品がきっかけで展示に立ち寄る人が多く見られた。

†リピーターが多数

本展示にはリピーターが多かった。友人たちを連れて３度以上来場されるという人もいた。ヨーゼフ・ボイスのビデオを最後まで見ようと再来場した人、大巻の作品が太陽光とシンクロする瞬間を見ようと、夕方ごろに再度来場する人が多かった。

†展示作品への大きな反響

インゴ・ギュンターの作品「Thanks a Million」では、松の木の種の入った封筒を鑑賞者約1500人が持ち帰った。
オノ・ヨーコのWish Treeには753枚のwishが書き添えられた。

作品のもたらしたこうした行為は、遠いバーゼルの地において東日本大震災を記憶にとどめ「忘れない」ということに、一定の効果を持つものと言えるだろう。

展示の総評２

†バーゼルでの協力者の存在

バーゼルでは、日本人や日本の血を引く人、また日本に興味を持つ人、今回の災害に関して心を痛めた人たちの多くの協力が得られた。
現地協力者や展示来場者との交流を通し、人と人とのつながりが生むものの大きさを痛感した。

†ヨーロッパ諸国での震災の影響力

ヨーロッパでは、東日本大震災はすでに過去のものとして忘れ去られかけており、人の記憶の脆さを感じた。
福島第一原発の事故により、日本が加害者側として海外メディアで大きく報じられたこともあり、ヨーロッパ諸国からの支援行為は長続きしなかったようである。

†意義のあった展示テーマ

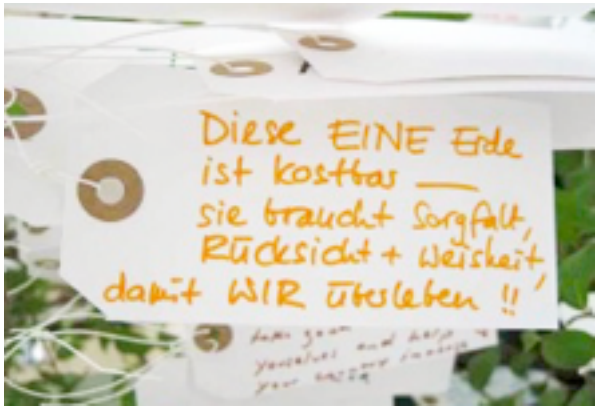
今回の展示は、あらゆる意味で「記憶」について深く考えさせられるものであった。震災から３ヶ月という記憶の薄れゆく時期に、「記憶」と「未来」をテーマとした展示を開催できた意義は大きかった。

オノ ヨーコ『Wish tree』に集まった753枚のWish

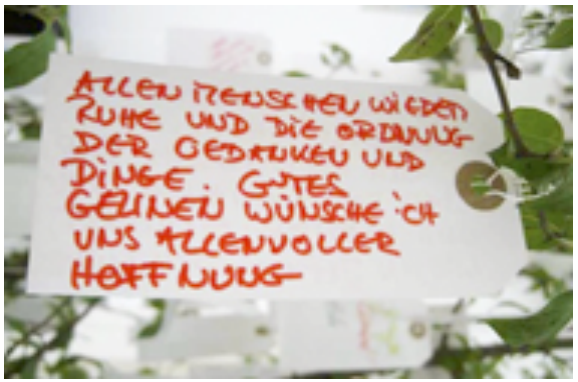
アイスランドのレイキャビク市にあるImagine Peace Towerに保管予定

日本のための生命の木

日本人がまた元気になりますように。

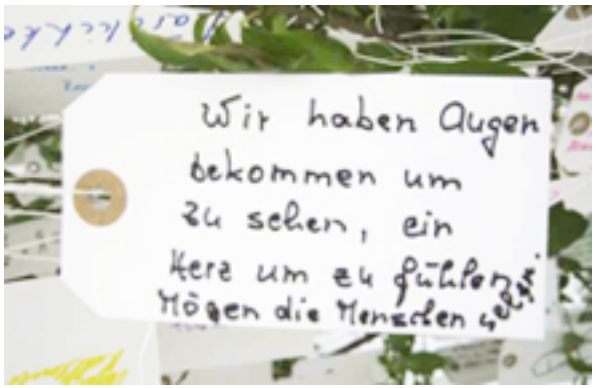


一つしか無い地球はとても貴重。私たちが生き延びる為に必要なのは、地球に対しての細心の思いやりと懸命さ。



人々みんなに安癒と気持ちと物事の整理を。ことが成る事を心から祈る。

種からまた1000の木が育ちますように。その木達からまた1000の木が…

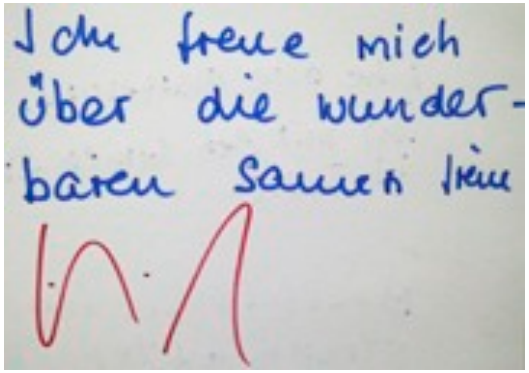


私たちは見る為に目を、感じる為に心を与えられた。人間がちゃんと見ますように。

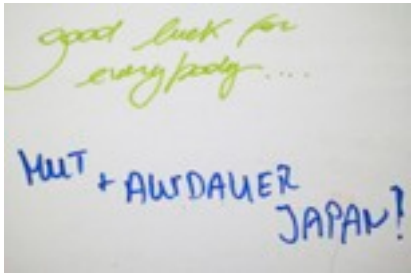
Message Book：会場内に置いたメッセージブックに書かれたメッセージ

Message Book外観

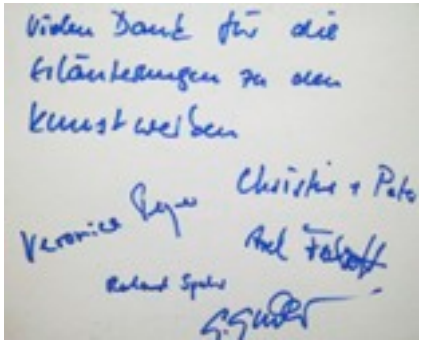
意義深い展示です。



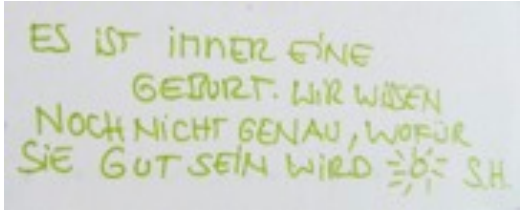
素敵な種をもらって、嬉しい。



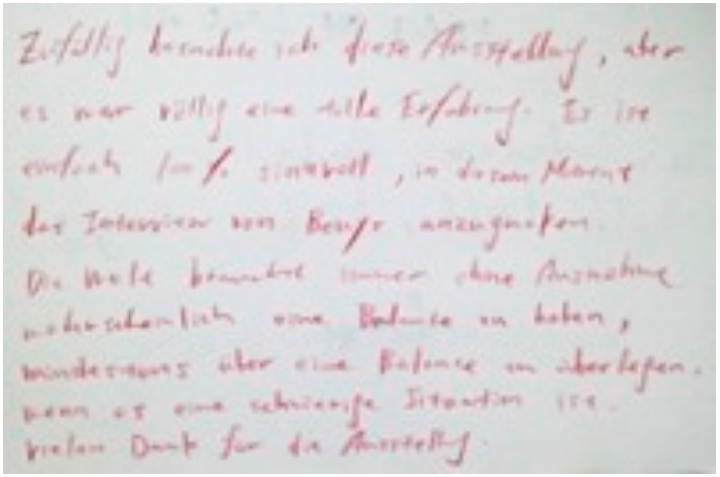
勇気をもって耐えぬいてね、日本！



作品を解説してくれてありがとう。

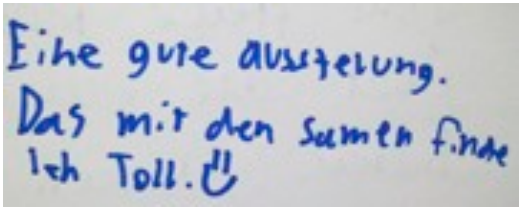


心の中に新しいものが生まれました。それが何に役立つようになるかは、まだ全然分からないけど。



偶然この展示に立ち寄ったんだけど、もう素晴らしい体験の一言でした。こんな時にボイスのインタビューを見ることは、100%意義深いとしか言いようがありません。

世界はいつも、きっと例外なく、バランスをとることが必要で、困難な時期にはバランスについて、少なくとも考えることが求められている。展示をしてくれて、どうもありがとう。



いい展示。種の作品が素敵（＾＾）

1%寄付プロジェクトに関する総評

† 参加ギャラリーへの説明不足

アートバーゼルは、アートエイドの企画に協力的であった。しかし、アートバーゼルと参加ギャラリーへの1%寄付の依頼について説明が不足していたために、最終的に1%プロジェクトへの協力を得ることができなかった。その結果、アートバーゼルからの協力は、アートエイドの展示の告知のみに限定された。

† 交渉方法の検討不足

寄付行為に関しては、売上の1%を寄付する、という形式にこだわらず、アートバーゼル側や参加ギャラリーとともに実現可能性を柔軟に検討すべきだった。また、アートバーゼルに参加する日本のギャラリーに事前に説明し、国内ギャラリーの協力を取りまとめたうえでアートバーゼル側とより具体的な交渉をするなど、交渉方法に工夫が必要だった。

† 交渉期間の不足

非常にタイトな日程でのプロジェクトだったため、各団体への交渉に十分な時間がとれなかった。
くわえて国内ギャラリーやアートバーゼルとの交渉にあたる実行委員が渡辺以外にいなかったため、渡辺の負担が極めて大きいものとなってしまった。交渉のためのドイツ語資料の確認不備や英語での言い回しなどまでチェックが行き届かなかった。

実行委員会の総評

† 全員がボランティア

渡辺のTwitterを見た人が自然発生的に集まり、実行委員会が誕生した。全員がボランティアで関わったにもかかわらず、メンバーの多くが最後まで高いモチベーションを持って展示実行に関わった。

† 震災発生後の3カ月後に国際展をオープン

バーゼルと東京の２つの実行委員会の運営にあたっては、実行委員会のメンバーは、メーリングリスト、Drop Box、Google Docなどのインターネット技術を活用することで、展示準備を進めた。結果、震災発生後の３ヶ月後には、バーゼルにて国際展をオープンさせることができた。

† バイリンガル/トライリンガルの人材の不足

３言語にまたがるPRには、バイリンガル人材がいなくしては、効率的な告知をすることが難しかった。
その結果、海外メディアへのPRが不十分だった。
３言語にまたがる国際企画を開催する場合は、英語を公用語として、そこから日本語資料とドイツ語資料を作る、という方法を取らなくては、全体の進行に支障が出た。

† 法律専門家の必要性

実行委員会に法律専門家がいなかったため、展示実行に向けてのインフラ作りが困難であった。
とくに、スイスの銀行口座の開設や寄付者への税金控除のシステムなどの整理が難しかった。

実行委員会の解散

† **実行委員会の解散**

スイス・バーゼルでのチャリティ・アート・プロジェクト終了に伴い、この報告会をもって、ART-AID実行委員会を解散とする。

† **松の木プロジェクトの今後**

インゴ・ギュンターによる松の木を植えるプロジェクトに関しては、実現可能な方法を長期的に探って行く。